



盲導犬から見る戦争と福祉



北村 陽子（西洋史学）

第一次世界大戦の戦争障害者（戦争中の軍事行動による傷病者、軍人とは限らない）支援について調べていた時のことです。戦後の1920年に作られた全国援護法の条文に、「戦争失明者は盲導犬を得る」とありました。盲導犬は義肢と同じ支援器具つまり必需品として、戦争中の軍事行動による視覚障害者に国から無償で貸与されたのです。

第一次世界大戦は、戦車や飛行機などの新兵器が投入されて死傷者が桁違いに増えた戦争です。殺虫剤の製造方法を応用した毒ガスは、多くの失明兵士を生みだしました。急に失明した彼らは、部屋の中での移動にも困ったため、彼らへの生活支援は緊急の課題となりました。その補助を目的として、前線で怪我人を探索する救護犬を育成していた団体が、戦争失明者に利用しやすいよう訓練し直して1916年に提供したのが盲導犬でした。さらに調べると、個別には19世紀初頭から視覚障害者の生活支援に犬を活用した例が

いくつかありました。とはいえ、組織的に育成がマニュアル化されたのは、第一次世界大戦中からでした。

盲導犬に適した犬種や育成方法などは、戦時中から専門家のあいだで活発に議論されましたが、盲導犬の認知はなかなか進みませんでした。1922年には費用を自弁できる一般市民も盲導犬を利用できるようになって、いわば門戸が開放されました。しかし1927年の戦争失明者の手記を読むと、特別な器具を装着した犬を連れているにもかかわらず、歩いているところにぶつかってくる人がかなり多かったうえに、謝るどころか罵声を浴びせる人もいたと嘆いています。それから90年。わたしたちは、視覚障害者と盲導犬に対する意識を変えることができたのでしょうか？

（写真：盲導犬と戦争失明者（1918年）出典：Jahres-Bericht für 1917/18 des Deutschen Vereins für Sanitätshunde, S. 57.）

分野・専門紹介—File34

英語をたよりに、人間の言語能力を探る—「生成文法入門」

分野・専門名：英語学

突然ですが、“Could John run fast?”のような疑問文を作りたいとき、みなさんは何を考えるでしょうか。“John could run fast.”のような肯定文を思い浮かべ、左から2番目の単語を文頭に置けば疑問文を作れると考えるかもしれません。しかし、2番目の単語を文頭に置くだけでは英語におけるすべての疑問の作り方を説明できません。“The man could



run fast.”という文に対応する疑問文を正しく作れないでしょう。「文の中で一番左にある(助)動詞を文頭に置く」という仮説を立てたとしても、今度は“The man who can say honest things is beautiful.”といった文に対応する疑問文を作れないでしょう。疑問文の作り方を考えるだけでも、人間はただの単語の並びとし

て言語を理解しているのではなく、文の構造を理解して文を作っていることが分かります。

すべての人は、言葉についての教育的指導を受けずとも、また、ある表現がその言語において可能な表現であるという直接の証拠を与えられずとも、まわりで話される言葉を聞いているだけで、生まれてから短い間に言語を習得します。人間以外の動物も意思疎通をしますが、人間の言語ほど豊かなコミュニケーション体系を持ちません。言語は人間という種に固有の能力として存在しています。「生成文法入門」の授業では、英語という人間言語をたよりに、さきほどの疑問文の作り方を含む様々な現象の背後にある人間の言語能力を探ります。

さて、学問の内容だけ聞いていると、とても難しいように感じたかもしれません。ですが、心配ありません。研究室の仲間と一緒に学びを深めていきます。本研究室では、新入生歓迎会、合宿、クリスマス会等を通して団結を深めています。皆さんと共に研究できる日が来ることを、楽しみにしております。

(森 敏郎・博士後期課程1年)

分野・専門紹介—File35

イギリスの大学との共同プログラムに向けて—国際ミニカンファランス 「ワールド・シネマの新地平」(2018年11月10-11日)

分野・専門名：映像学



映像学分野・専門は、現在、イギリスのウォリック大学映画テレビ学科との共同 PhD プログラム——グローバル・スクリーン文化研究 PhD コチュテル・プログラム(仮称)を2019年10月に発足すべく準備を進めています。その一環として、去年は共同ワークショップや大学院セミナーを開催しましたが、今年は11月10-11日に‘New Horizons in World Cinema’と題した国際ミニカンファランスを開催しました。このカンファランスには、過去50年間のフィルム・スタディーズの歴史の中でもっとも影響力のある研究者の一人だと言ってもよい、アムステルダム大のトーマ

ス・エルセサー名誉教授を基調講演者にお招きしました。また、ウォリック大学のカール・スクーノヴァー准教授と名古屋大学映像学の小川翔太准教授がそれぞれ「地盤沈下の映像」と「帝国日本におけるホーム・ムービー」について講演を行い、続く「大学院生ワークショップ」のセッション企画では、名古屋大学から2名、ウォリック大学から1名、筑波大学から1名の計4名の院生が口頭発表を行い、それを基に討論を行いました。2日目には、ご自身の2世代前からの家族史とドイツの歴史との交差をたどったエルセサー教授監督の自主制作映画を上映し、質疑応答を行いました。2日間にわたってスタッフも含め70名ほどの参加者があり、知的刺激に溢れた濃密な時間とともに過ごすことができ、来年度発足のコチュテルプログラムにとって大きな弾みになったと感じています。現在高校生である皆さんの中からも、将来このプログラムに入学する人が出てくることを願ってやみません。

(藤木 秀朗・教授)

最近の文学部

名大文学部生の年越し(4年生編!!!)

他大学より卒論提出が早い本学部の4年生にとって、年末年始は自分との厳しい戦い…のはずですが、クリスマス頃に計画的に提出を済ます人、提出前なのに学生最後の冬休みと旅行に行く強者も近年増えている気がします。(YK記)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)